

追悼



故 北川照男 先生 略歴

(大正15年4月2日生～平成29年12月18日没)

<略歴>

1950年 東京慈恵会医科大学専門部卒業
日本赤十字中央病院インターン

1951年 東京慈恵会医科大学(小児科学)副手

1955年 東京慈恵会医科大学(小児科学)助手

1959年 東京慈恵会医科大学(小児科学)講師

1966年 東京慈恵会医科大学(小児科学)助教授

1971～1992年 日本大学教授医学部勤務(小児科学担当)

1992～1993年 日本大学総合科学研究所教授

1993年 国際学院埼玉短期大学教授

1994年 国際学院埼玉短期大学副学長

1994年 日本大学名誉教授(平成29年12月18日)

1996年 財団法人東京都予防医学協会理事

1997～2015年 財団法人東京都予防医学協会理事長

日本小児内分泌学会理事 1987～1992年
日本人類遺伝学会理事 1987～1989年

<国際学会役職>

International Pediatric Nephrology Association: Associate Secretary 1987～1991年
International Study Group of Diabetes Mellitus in Children and Adolescents: President 1987～1990年

<学術大会会長>

第15回日本小児腎臓病研究会 1979年
第16回東日本小児科学会 1989年
第19回日本腎臓学会東部学術集会 1989年
第34回日本先天代謝異常学会 1991年
第32回日本先天異常学会 1991年
The 20th Annual Meeting of the International Society for Pediatric and Adolescent Diabetes: 1993年

<日本腎臓学会における経歴>

学術評議員 1977～1992年
理事 1983～1991年
名誉会員 1992年～

委員会活動

編集幹事 1974～1982年
編集委員 1989～1992年
学術委員 1986～1991年
学術委員長 1989～1991年
施設審査部会 1990～1991年

<その他役職>

日本母性保護医協会先天異常調査委員会委員, 日本学校保健会評議員, 恩賜財団母子愛育会特殊ミルク安全開発委員会委員長, 日本私学振興財団学術振興資金選考委員会委員, 日本学術会議出生発達障害研究連絡委員会委員, 日本学術会議病態代謝研究連絡委員会委員, 日本学術会議遺伝医学研究連絡会議委員, 国際糖尿病連合(International Diabetes Federation)小児糖尿病委員会委員, 学術審議会専門委員, 中央薬事審議会臨時委員, 医療関係者審議会委員, 神経疾患研究推進委員会委員, 医薬品安全対策特別部会員, 腎不全対策推進会議専門委員, 腎不全対策研究事業評価委員

<学会理事・理事長歴>

日本小児科学会理事 1982～1985年
日本先天代謝異常学会理事長 1983～1991年
日本小児腎臓病研究会会長 1979～1983年
日本小児腎臓病学会理事長 1983～1992年
日本先天異常学会理事 1989～1992年
日本先天代謝異常スクリーニング研究会理事1979～1989年
日本マス・スクリーニング学会理事 1989～2012年

<表彰>

1985年11月 2日 財団法人腎研究会学術賞受賞
1986年11月 7日 日本人類遺伝学会賞受賞
1992年 4月29日 紫綬褒章受章
1997年11月 勲三等瑞宝章受章

北川照男先生を偲んで

板橋中央総合病院副院長 / 日本大学客員教授

高橋昌里

日本大学名誉教授 北川照男先生は平成 29 年(2017 年)12 月 18 日に 91 歳でご逝去されました。先生は生前、先天性代謝異常症、小児内分泌・糖尿病、遺伝性疾患、腎臓病など幅広い分野で精力的に活躍され、「大教授」と呼ばれるに相応しい教授でした。そしてその門下で、特に腎臓学を専攻させていただいた一人として、ここに追悼文を捧げたいと存じます。

北川先生は 1950 年に東京慈恵会医科大学専門部を首席で卒業され、日本赤十字中央病院でインターンを行う傍ら、東京大学伝染病研究所(現医科学研究所)で山川民夫先生に師事し、生化学研究の指導を受けました。その後、ウィスコンシン州立大学、タフツ大学への留学を経て 1966 年に慈恵会医科大学小児科助教授となり、1971 年に日本大学教授(小児科担当)に就任されました。私は 1977 年に北川教授率いる駿河台日本大学病院小児科に入局しましたが、回診ではテキストブックのみならず、最新の英文論文を何遍も読み込むことや論理性の高い返答が求められ、自ずと EBM を実践させられていたように思い出されます。

北川先生の腎臓病学領域における最も大きな功績の一つは、日本医科大学小児科の村上勝美教授とともに 1973 年の学校保健法規則の改定に際し「児童、生徒、学生および幼児の定期健康診断の(3)に新たに、[尿]の検査を必須の項目として加え、試験紙法 によって尿中の蛋白などについて検査することとし、腎炎、ネフローゼ症候群などの早期発見に努めること」という項目を組み入れることに尽力されたことではないかと思います。当時は慢性腎炎に対する治療法も確立されていませんでした。しかし、多くの小児腎臓病研究者は早期発見された慢性腎炎患者に直面しその治療に苦悩し、そのなかから小児慢性腎炎の治療が世界に先駆けて報告されるようになりました。現在の学校検尿→慢性腎疾患の早期発見→早期治療による腎予後の改善の端緒はこの学校検尿に始まるものと考えられます。先生はその後も全国の学校検尿のデータをアンケート調査でまとめ、今では常識となっている「尿異常のなかで血尿単独群では腎機能が低下するリスクが非常に低い」ことを明らかにされました。

日本小児腎臓病学会におきましては、その前身である小児腎臓病研究会の会長を 1979~1983 年、それに引き続き日本小児腎臓病学会の理事長を 1983 年から 1992 年まで務められました。つまり、1986 年の国際小児腎臓学会(IPNA)の誘致開催も含め、およそ 14 年間にわたって日本小児腎臓病学会を牽引されたこととなります。この間、1985 年から 1993 年まで厚生省心身障害研究「小児慢性腎疾患の予防、治療、管理に関する研究」、「小児腎疾患の進行阻止と長期管理のシステム化に関する研究」、さらに「小児腎疾患の進行阻止と長期管理、治療に関する研究」の班長を務められ、膨大な研究費を小児腎臓病研究者のみならず多くの腎病理、腎生理、腎薬理、成人の腎臓病研究者に配分されました。この研究費が当時日本各地で花開きつつあった小児腎臓病研究者の発展を促し、日本における小児腎臓病研究ひいては腎臓病研究の基盤を形成する大きな足掛かりとなりました。

それと並行して北川先生は、ネフローゼ症候群に対するシクロスポリン療法の全国的治療研究組織を立ち上げられ、効果についての検討を重ねた後でさらに二重盲検法による治験を実施し保険適用を獲得されました。これは、治験を開始してしばらく経った頃に厚生省の方針転換があったためでしたが、この治療

研究によってステロイドやエンドキサンなどを大量に使用せざるをえなかった患者さんに大きな福音をもたらしたのみならず、治験費用として研究者の資金獲得にもつながり小児ネフローゼ症候群の治療研究にも大きな役割を果たしました。

このように、北川先生はご自身が高名な研究者であったのみならず、研究組織をオーガナイズして資金を獲得し、それを効率良く分配するというマネジメントにおいてもその能力とエネルギーを遺憾なく発揮され、日本における腎臓病研究の発展に大きな貢献をされました。

日本腎臓学会のなかでも、北川先生は1977年から学術評議員、1983～1991年は理事として活躍され、1992年には名誉会員に選出されています。この間、編集幹事、学術委員長などを歴任され、1989年には日本腎臓学会東部学術集会を主催するなど学会の振興に大いに貢献されました。

先生は1992年に日本大学を退任後も2015年(89歳)まで東京都予防医学協会の理事長として東京都の学校検尿事業にかかわってこられました。そして80歳を過ぎても相変わらず頭脳は明晰で、先生が82歳のときに英文原著論文を主著者として執筆されたことには本当に驚かされました。

北川先生ご自身から「若い頃は病弱で結核も思い苦労した」とお聞きしましたが、私が入局した1977年頃にはお酒も大変強く、相当飲んでも次の日は涼しげな顔で仕事をしていらっしゃいました。私がどうしてそんなに強いのですかと聞くと、「戦前の生まれだから鍛え方が違うよ」というような答えが返ってきたのを覚えています。挨拶も大変お上手でした。いつもゆっくりとした口調でユーモアを交えて丁寧な話され、大切なことは欠かさず、決して長くない挨拶を述べられましたので、公的な会合で時に気にしなければならぬ「ご高齢の方の長い挨拶」の時間配分を気にする必要は全くありませんでした。

この追悼の文章を書き始めてから、いろいろなことが思い出されます。私自身は、卒業して入局したものの学外出向あるいは研修の期間も含めて卒後6年目に静岡県立こども病院に出向し、18年後に大学に戻った際には北川先生は退任されていたいらっしゃいました。したがって実際に薫陶を受けたのは3年と少ししかありません。しかし、私にとっては北川先生の学問に対する考え方、勉強の仕方を学ぶには十分な期間だったと思います(できれば仕事の仕方も教わりたかった)。そして、北川先生は私にとっての恩師であったと同時に、同時代を生きた他の多くの研究者にとっても目指すべき目標であり輝ける星だったのでないかと、今思いを馳せる次第です。

先生のご冥福をお祈り申し上げます。